

あびの文化

発行人 美崎 大洋
 我孫子市 高野山
 250-23
 04(7182)
 0861

プロジェクト報告会&懇親会中止となりました。
 10月29日(日)に予定していましたがプロジェクト報告会&懇親会は事前申し込み制で参加者を募りましたが、申込者が極端に少なく、当初の目的を期待できないと判断し、中止としました。事前に申し込みがあった方には中止の旨をお詫び少々連絡しましたが、当日直接会場に行かれた方もいらつしたようで、その方々には大変申し訳なくお詫び申し上げます。

平成29年度統一クリーンデーのお知らせ

美しい手賀沼を愛する市民の連合会(美手連、当会も所属)は流域住民へ手賀沼浄化意識を呼びかけることを目的として毎年、「手賀沼統一クリーンデー」(手賀沼ふれあい清掃)を開催しています。
 ご都合のつく方はご参加ください。
 今年の日程は次の通り。
 日時 12月3日(日)9時から11時まで
 集合場所 手賀沼公園多目的広場
 集合時刻 8時30分から8時55分
 目印 当会担当役員が我孫子の文化を守る会の「緑の旗」を掲げています。
 清掃作業の内容 ゴミの分別①可燃ゴミ②不燃ゴミの2種類に分けて集める。

**◎一人ひとりの力でもっときれいな手賀沼に！
 「やくらプロジェクト」賛同者募集について**

前号(9月号)でご案内しましたが、当会として桜の植樹費用の寄附を募集する「やくらプロジェクト」を発足させましたので重ねてご報告します。
 会として既に1口(3万円)申し込みを済ませており、「我孫子の文化を守る会」の名称を樹名板に記載することになりました。

ご賛同の方はメールまたは電話にてお申し込みください。
 寄付1口1,000円
mss_misaki@yahoo.co.jp
 または
 電話 04(7182)0861
 美崎まで。



第10回ベイ・東葛地域連絡協議会・交流会開催

前号(9月号)でも再々お知らせしましたが、「千葉県観光ボランティアガイド」団体のうち、「ベイ・東葛エリア」協議会・交流会が11月18日(土)我孫子市で開催されます。当会のほか、あびこガイドクラブ、ふるさと我孫子ガイドの会の3団体が共催という形でホスト役を務めます。我孫子市と我孫子市教育委員会からも後援を頂いています。
 現在のところ12団体98名が当日参加の予定です。

当日は、午前中ややきプラザ9階ホールで交流会を実施、午後は3つのコースに分けて我孫子市内を案内し、3時頃解散となります。コースは次の3つ。
 コース①我孫子宿と利根川東遷
 コース②白樺派文人たちの足跡をたどる
 コース③古代の我孫子に思いを馳せる
 わずか一日ですが、交流会や史跡案内を通じて近隣・周辺地域のボランティアガイド団体に我孫子の歴史と魅力を知ってもらおうと同時に我孫子の良さも実感していただくことを期待しています。

**リレー連載「白樺派と私」
 我孫子と芥川龍之介**

越岡 禮子

芥川龍之介の足跡が我孫子にあることを知る人は少ないと思う。大正十一年七月二十七日、三十歳の龍之介が自身のスランプ脱出の相談に、当時我孫子に住んでいた志賀直哉を親友の小穴隆一とともに来訪したことはよく知られている。

その答えとして直哉は暫く筆を休むことを奨める。龍之介は期待と違う助言に「金持ちの息子はいいなあ」と思ったという。
 この日、すでに我孫子に住んでいた滝井孝作の仮寓を訪ねて一句を詠んでいる。それは澄江堂句抄に「安孫子なる折柴を訪ふ」の前書のあとに次の句がある。

蒲の穂はなびきそのつつ蓮の花

滝井は俳人河東碧梧桐の弟子で折柴はその俳号である。滝井が大正十一年四月から約一年住んだ仮寓趾は我孫子市寿二丁目二十一番地にある寿古墳公園の一角にあり、滝井を紹介するプレートがある。亡妻リンとの純愛を綴った『無限抱擁』完結の家と知られたこの家は、大家から借りる時、志賀直哉も一緒に見分して「こんな広い所にちよつと住むと思ひ出になるネ」と言ったと滝井は記している。

龍之介と滝井は共に田端に住んでいた時期があり、志賀の弟子と一般に思われている滝井だが、初めは龍之介に小説の手ほどきを受けていた。滝井はその恩を忘れず晩年まで芥川賞の選考委員を務めている。

龍之介の終生の親友、小穴隆一は春陽会会員の画家であり、滝井と同じ河東碧梧桐門下であった。滝井の紹介から龍之介の無二の親友となり龍之介の最晩年まで深い交流があった。龍之介の三男、多加志は隆一の訓読みから貰ったものである。因みに長男比呂志は学生時代の親友・菊池寛、二男の也寸志は一高時代の友人でのちに大阪市立大学長となる恒藤恭から命名した。

龍之介は我孫子とその周辺を写生している。大正十一年一月末、行燈の会(の俳人仲間三人(小沢忠兵衛、遠藤清平、小穴隆一)と我孫子駅を振り出しに布施、取手、小堀、湖北、布佐を一泊で巡っている。この旅の目的はその後、龍之介が好んで描いた河童が手にする蒲の穂を手賀沼で写生することであった。

この旅行の成果は二巻の紀行絵巻になり、布施絵巻、布佐絵巻と銘がつけられ駒場の日本近代文学館に所蔵されている。その内容の詳細は紙面の都合で紹介で

きないが、幸い近年、日本近代文学館から『芥川龍之介の書画』という一冊が発刊され全容が紹介されている。高価本なのにその存在を我孫子市民図書館に話したところ、早速に購入してくれたので関心のある人は目を通して欲しい。そこには私たちが日頃親しんでいる近隣の各所、布施棄天、富勢小学校の大松、曙山から見る弁天様の楼門、利根川越しに見る筑波山や白帆、小堀の渡し、手賀沼の鯉や笹舟等々が句を添えて戯画風に描かれていて興味深い。

布佐では釜屋という旅館で一泊したが、その宿は現在のナリタ屋の近くにあつたようだ。

この旅行記は小穴隆一も『鯨のお参り』という作品にしていて、この宿賃があまりに安いので心付けを多めにしたところ、「金鶏」という煙草を四個お返しがあつたことや河童の宿と呼ぶに相応しい宿などと記しているが、その釜屋は今はない。そしてまた龍之介らが訪ね来た手賀沼も今の布佐には一条の川となつて手賀川と呼ばれている。



水虎晚帰之図「芥川龍之介の書画」より

私は子供の頃「蜜柑」、「トロッコ」、「鼻」、「杜子春」、「蜘蛛の糸」等々、親しく作品に触れた。その著者・龍之介が見た景色を今、私達も見ている。我孫子の皆さんに知って欲しい我孫子と芥川龍之介である。

私が出会った忘れられない人々(その2)

菅野 哲哉

「北のベネチア」と呼ばれるオランダのアムステルダムは王宮広場を取り巻くように150本余りの運河が同心円状に豊かに水を湛えています。いずれも黄金時代の十七世紀に掘られたもので、岸に建ち並ぶ中世風の建物、個性的な橋、レンガ造りの道路、など今

なお当時の面影が濃厚です。今回はその北の都の地で勤務していた時期に出会ったいずれも強烈な個性の持ち主達のことについて書いてみたいと思います。いずれも約半世紀前のエピソードですが折につけ思い出す懐かしい人々です。

「松本清張」

街の中心部から西に向かった地区の、有名な「アンネフランクの家」からさほど遠くない運河で一九六五年八月に男性のばらばら死体の入ったジユルミンケールが発見されました。警察の捜査の結果日本人商社マンであることが判明しましたが犯人を突き止めること無く捜査は終了しました。ほぼ同じ頃ベルギーの高速道路で東洋人の乗った乗用車がトンネルに激突して即死する事件が発生しました。運転者はベルギー在住の日本人男性で、殺された男性の有力殺害容疑者であることが判明しましたが、関連性の決定的な証拠は挙がらず、この猟奇的な事件は迷宮入りとなりました。両事件の関連性に着目した日本の作家、松本清張氏が一九六六年晩秋にアムステルダムに現地取材のため来訪されました。

同氏の通訳に予定されていた現地駐在の日本人が急用のため、急遽私が通訳を受け持つことになりました。一般的な通訳ならいざ知らず、気むずかしそうな作家とのおつきあいに当初は断りましたが、代役がないためやむを得ず引き受けることにした次第でした。

同氏はそのころ盛んに推理小説で人気を博していた重厚な作風の作家でしたが、私はわずかに「点と線」を読んでいたに過ぎませんでした。その他に「砂の器」「ゼロの焦点」などが同氏の代表的な作品でした。

さて、松本氏は私との挨拶もそこそこで早速止宿先のアムステルダムヒルトンホテル裏の運河視察が始まりました。当時の会話の内容はすっかり忘れましたが、オランダ側の案内人の説明を懸命に通訳し、清張先生の反対質問を先方に通訳する、という作業が続きました。ホテル裏のこの運河は事件のあつた現場ではなく、公園に面した明るい運河の一つで、人間の入ったケースが浮かんでいるなどのイメージは湧きにくい雰囲気

一帯でした。独り言を言いながら清張先生は身を乗り出して水面を眺め、れんが造りの橋に近づいてじっくりと検証するように覗き込んでいたの思い出します。その後、ケースが発見された実際の運河、ヤコブファンレネップ運河まで足を伸ばし更に詳しく現地視察をされました。ヒルトンホテルの位置から現場までは何本かの運河と数カ所の橋を渡り往復しましたが、十七世紀の面影を濃密に残す古めかしい建物のたたくまいや行き交う人々などにはさほど興味を示されない様子でした。私は当地に赴任後まだ半年ということもあつてすべてが珍しく、何やかやと説明して差し上げたようですが、始終たばこをくゆらせ、短く、「うん、うん」「あ、そう」などと短い返答が帰って来るのみでした。多分同氏の頭の中は街の様子や通行人などよりも事件の真相や小説の組み立てについて熱心に考えをめぐらせておられたのではないかと思います。帰国後、同氏は「アムステルダム運河殺人事件」という中編の推理小説を一九六九年四月に世に問うています。外国で起きた日本人が関わる事件に題材をとったミステリー小説は当時の話題作となりました。対象物に徹底的に肉薄し、思索をめぐらせ、推理の限りを尽くして作品を練り上げる同氏の作家姿勢には強い感動をおぼえました。

余談になりますがアムステルダム市街の建物は半数以上が十七世紀〜十八世紀の建物で、いずれも現在なお内装に思い思いに手を加えて人が住んでいます。アンネフランクの家は王宮広場にほど近い西教会の裏手に位置し一六三五年の建築で現在は博物館として一般公開されております。列を作るほどの現在の来館者の賑わいと違って、ある年の冬、私が訪問した当時は私ただ一人。狭い階段を上る靴音に第二次大戦中密かに身を隠していたユダヤ人達を探索するナチ兵士の恐ろしい足音もかくやであつたかと想像した次第でした。

「林家三平夫妻」

「どうもすいません！」「もう大変なんすから」「よしこさん！」などのギャグでおなじみだった先

代林家三平とおつきあいの思い出は今以て新鮮で、満面笑顔で接してくれるこれほど人間味豊かな人は他に知りません。当時空港での旅客接遇の仕事をしていた私は一九六八年頃、三平師匠と奥さんの香葉子さんを到着口で出迎えました。東京の営業課からの「必ずヘルプするように」との要請で同じ夫妻の到着を楽しみにしていました。ゲートから現れるやいなや、三平師匠は「どーもすいません。菅野さん。よろしくおねがいします。」と、あの懐かしい大きな声で近づいてきました。隣では大きなくぼがチャームポイントの奥様がにこにこ笑っています。広い空港到着ロビーは静かなだけに三平さんの声に他の乗客達は何かと振りむいています。入国手続き、荷物受け取り、換金、などを済ませて私の車でホテルへ案内しました。空港から街の中心地までは道路も空いていて約20分です。長旅にも拘わらずお二人は元気いっばいで、王宮広場前に建つ由緒あるホテルにチェックインし、小休止後早速街に繰り出しました。

今回の旅行はある民放テレビ局の番組「お料理大作戦」で優勝してお土産ヨーロッパ旅行を射止めたこと、香葉子夫人によれば初めての「遅れた新婚旅行」のことでした。さて街に繰り出した三平師匠は、テレビで見ると全く変わらぬ、商店の展示商品に興味を示して片々端からあれこれと手にとっては、「これ何に使うの?」「どこを押せば動くの?」などと店の商品に興味津々の態です。私が一番戸惑ったのは王宮広場前に建つバイエニコフという一番老舗のデパートを訪れたときのことでした。海外のデパートや専門店では一般的に客がある商品に興味を示すと、店員がすつと近づいてきてなにかと説明を始めることです。日本人の感覚では放っておいてほしい状況ですがセールと安全などの意味合いもあつてカスタッフにピタリと付き添われるのはありがた迷惑の感じもあります。天衣無縫で生来の陽気な性格からか、三平氏は店内をどんどん進んで様々な商品に興味を示し手にとつて眺める始末。日本では当たり前前の仕草が欧米ではかなり異例とも言える客の振る舞いに女性店員の

アテンション度も次第に高まっていった様子がうかがえました。結局このデパートでは三平師匠は一寸した小物を買ひ私もおつきあいで小さな置物を買ひ求めたようにおぼえています。そのあと中世の雰囲気漂わせる商店街を賑やかに3人でウインドウショッピングを続けました。珍しい運河の様子や岸辺に立つ古い石造りの家々をながめたり、行き交う大柄のオランダ人達とぶつかりそうになったり、珍しい街頭オルガンに聞き入ったり、運河沿いのカフェテラスでゆったりと憩う若者や家族連れの人々などを眺めたり、私の拙い説明に相づちを打ちながらホテルに戻りました。夕食を共にしたはずですが半世紀も前のことレストランの名やそのときの状況などを思い出せないのが残念ではあります。つねに明るく賑やかで少々の不便や不都合などに一切文句を言ひ立てない三平師匠、苦言を一切言わず常に夫をたてて明るくその場を盛り立ててくれる香葉子夫人。私は理想的なご夫婦像に接しこの時以来林家三平夫妻のファンになったことは間違いありません。三平師匠は漫談とも落語ともつかないにぎやかな芸風で爆笑王とよばれ、テレビの人気者でした。

「デュークエイセス」

ヨーロッパ旅行先の御三家といわれるロンドン、パリ、ローマから少し離れた位置にあるオランダは日本人旅行者が適度に来訪し現地駐在員はさほど対応に忙殺されるほどではありませんが、仕事のエリアは空港に限定されず、市内での対応も決して少なくありませんでした。東京の営業課からは、「〇〇氏とは必ず食事と共にしてほしい」「博物館や美術館にお連れしてほしい」「買い物に付き合つてほしい」「郊外の風車に案内してほしい」、など様々なリクエストが入ります。まだ若かったこともありできる限りの協力をしていたものです。来訪者には様々な職業や地位の方々がおられ、なかでも音楽、映画、芸能、関連の人々は可成り多数来られ懐かしさと共に親しさを感じました。一九六八年頃、デュークエイセスの皆さんが来訪したことがありました。演奏兼観光旅行といった旅の途中だ

つたようでした。現在も健在なチーフの谷道夫氏を始め若く元気なメンバー達とは一通りの繁華街の散策の後、夕闇迫る頃日本人にも人気のある「Fire Fire」五匹のはえ」という風変わりな名前のレストランに案内しました。同店は高級店の一つに挙げられるレストランでその夕方も予約の上全員で繰り込みました。メンバー4名、マネージャーに私の6名が店内の一角に陣取りました。まずは一行の無事のアムス入りと祝して大乾杯し、次いで次々と運ばれてくる料理に舌鼓を打ちました。全員若く元気な上さすがのプロボーカルグループ、誰と無く軽い歌声が聞こえ始めました。地元の銘酒と口に合う料理にすつかり満足した一行を頃合い良しと次に行き付けのバーに案内しました。

私は店のマネージャーに、このメンバーは日本の高名なボーカルグループであることを告げ、折角だから店内での演奏を許可してはどうかと持ちかけました。やがて店主は店内の来客に事情を話しOKのサインが出て同グループの店内演奏開始となりました。しばし相談をしていましたが谷リーダーの決定で、「Try or Remember」が決まり、軽快でテンポのよい米国のコーラス曲の合唱が始まりました。店内は名演奏に大歓声が湧きました。すすめられるままにおぼつかないながら私も途中からコーラスに加わりました。日本の一流コーラスグループとの「共演」はかけがえのない貴重な体験となりました。

一同すつかり銘酒と歌に気分を良くしてやや怪しい足取りでホテルにご帰還となりました。メンバーの皆さんは翌日買い物などを済ませて気持ち良く帰国の途につかれました。すつかりデュークエイセスのファンとなった私は帰国後も演奏会には出来るだけ出かけ、時には職場の女性達を演奏後の彼らの楽屋に案内してびつくりさせたりしました。それ以来同グループからは必ず年賀状をいただくようになり十年ほどは続いたと記憶しております。その後メンバーの一部入れ替えもありましたが、日本の一流ボーカルグループとの「知己」という思わぬ幸運に恵まれたことを密かに我が身の幸せと感謝している次第です。

（プロジェクト報告）
 関東建築探訪報告書第四十二回
 「様々な建築の世界（座学）」

稲葉 義行

今回の関東建築探訪は、八月の猛暑の中での視察では熱中症の心配があるため、座学とし、世界の代表的な建築物を藤井リーダーが講師として解説をする講座としました。

講義内容は、紀元前二五〇〇年のクフ王のピラミッドから二〇〇三年建設のジュビリー教会まで三十六の建築物について建設上の特徴及び問題点等を解説していただきました。この報告書では説明された全ての建築物を記載できませんが、主要な建築物について概要を報告します。

（ア）クフ王のピラミッドは、紀元前二五〇〇年頃古代エジプト建築の代表作である三大ピラミッドのうち最大で複雑な内部を持つピラミッドです。三百万個の石灰岩や花崗岩の立方体の石を使い、各辺の長さは何れも二百三十メートルで、四辺は正しく東西南北に向けており、古代エジプトが持つていた高い技術の一端が窺えます。

（イ）紀元前一四〇〇年頃エジプトに建設されたルクソール神殿は、ナイル川の東岸にあり、絶壁のようにそそりたつパylon（塔門）と呼ばれる入口はこの神殿を建てたラムセス二世の彫像と、一つの花崗岩から削り出した一本のオベリスクで飾られています。記念碑の始まりといわれているオベリスクは二本ありましたが、現在、一本はパリのコンコルド広場にありま

（ウ）古代ローマの代表的な建築物コロッセウムは五万人の観客を収容する世界最大の闘技場で、西暦八十年頃古代ローマ人の高い技術を駆使して十年で完成させました。長径百八十八メートル、短径百五十六メートルの壮大な楕円形建築の材料はローマ近郊で採れる凝灰岩を使用しています。アーチと列柱を組み合わせた外観デザインは、こ

の後の、西洋建築様式のベースとなつてい

（エ）伊勢神宮は、六九〇年持統天皇の時代に正式に世界に紹介された天照大神を祭る神宮です。二〇年ごとにすべての建物を建て替える式年遷宮で知られています。社殿は切妻屋根を茅で葺き、柱を直接地中に埋め込んで建てる総ヒノキの社で神明造りと呼ばれます。

（オ）マチュピチュは標高二二八〇メートルの山中に残る空中都市で、スペインの侵略を逃れたインカ帝国の皇帝が築いたもので、建築物は精緻に組まれた石造りになっています。当時、インカには車輪や滑車の文化がなかったにもかかわらず、急峻な山の斜面に多量の石材を運び上げ、この都市を造るには夥しい人海戦術により造られたことは、想像に難くありません。

（カ）タージ・マールはインドのムガル帝国五代皇帝がつくったインド・イスラーム建築の傑作です。若くして亡くなった王妃の霊廟として、二〇年の歳月をかけて作られました。庭園や水路を抜けた軸線上の奥に、四本の尖塔を従え建物上部にドームを載せたこの建築物はジャヤプル産の白い大理石が使われ、六十五メートルの高さとなっています。



（キ）ドイツのノイシュヴァンシュタイン城は、作曲家ワーグナーに傾倒するなど芸術や文化を愛したバイエルン国王ルートヴィヒ二世が中世騎士道への憧れとロマンを形にすべく半円状のアーチの門や小さ

な尖塔を設け、十三世紀初頭の後期ロマネスク様式を模したロマンティズムを一杯詰め込んだ夢の城となつています。設計は建築家ではなく宮廷劇場の舞台美術を担当する画家のクリスチャン・ヤンダが当たりました。

（ク）スペインのバルセロナにあるサグラダ・ファミリアは、アントニ・ガウディが設計し、一八八二年から今も工事が続く未完の傑作で、構造にもデザインにも豊富な工夫が施されています。中央の身廊を3つのファサードが囲むバシリカ形式の教会です。4本の鐘塔と3つの門を持ち、精緻な彫刻群で飾られた「誕生のファサード」はガウディが存命中に完成した数少ない部分です。細長いトウモロコシを思わせる鐘塔は、放物線を立体にして中身を空洞にしたような作りで、ゴシック建築の様にバットレスの助けなしで高く建てられる丈夫な構造となっています。これは、ガウディが長年研究していたアーマでもあります。

（ケ）アメリカ、ニューヨークの摩天楼の代表格クライスラービルは一九三〇年完成の、銀灰色のタイルで覆われた高さ三二〇メートルの超高層ビルで、当時、最先端のデザインであったアール・デコ様式を取り入れた高い装飾性が自慢の建築物です。

（コ）世界で初めて屋根を釣り上げて架けた丹下健三設計の国立代々木競技場は、美しい曲線を描く外観と壮大な内部空間を持つ、日本の近代建築を代表する傑作です。一九六四年東京オリンピックに間に合わせるため、わずか七カ月で建設されました。二本の柱の間に太いケーブルを渡し、屋根を釣って架ける構造を採用しています。吊り屋根は軽くて風の影響を受けやすいため、柱とケーブルの間には制振オイルダンパーを付けています。直径一一〇メートルの円形の体育館に柱は見当たらず、屋根を支えるのは二本のケーブルのみ。吊り橋とも違う、より複雑なバランスを実現した構造となっています。

（サ）一九七七年にフランスのパリの街に現れた、まるで

工場の様に柱や配管が露出したポンピドー・センターは、現代美術館や研究施設を擁する建物として国際コンペで選出されましたが、奇抜な姿のためパリ市民を巻き込んだ景観論争を引き起こしました。一番外側の鋼管フレームで建物全体を支え、室内はガラスの壁で囲み、さらに設備用の配管に色を付けて巡らせるようなハイテク・スタイルは、求められる機能や合理的な技術をもとに建築の形を決め機械のような建物を世に送り出しました。

(シ)キリスト誕生二千年を記念して、二〇〇三年に建てられたイタリア、ローマのジュピター教会はリチャード・マイヤーの設計で、二つの湾曲した壁でキリスト教の「三位一体」を暗示させ、この壁で仕切られた空間に礼拝や洗礼などの機能を割り当てました。半径約三十八メートルの球の一部を切り取った形の壁は成型されたコンクリートパネルを積み上げ、ケーブルで固定しています。化学反応を利用した浄化機能により表面が白く保たれている白

亜の教会となっています。

当日は、お盆明けの直後で、開催の連絡が遅れたこともあり参加者は四名と、少人数となりましたが、講師の丁寧な説明により、活発な質疑応答の時間もたっぷりとれ、予定の時間を三〇分も超過する実り多い講座となりました。



我孫子の巨木・名木を訪ねる会

「樹木観察会報告」第11回

市川市行徳の巨木観察：稲荷神社(千寿銀杏)・神明(豊受)神社(銀杏とケヤキ)・源心寺(銀杏)・柏井子安神社(スダジイ)

佐々木侑

2017年9月22日(金)、この日は曇り空で蒸し暑い日であったが、メンバー11名が市川市行徳に出かけ巨木観察を実施した。

この日の行程：我孫子駅改札9:00集合↓新松戸武蔵野線乗換↓西船橋乗換↓メトロ東西線行徳駅↓「稲荷神社」↓行徳駅バス停↓京成バス行徳1丁目↓「神明(豊受)神社」↓京成バス源心寺↓「源心寺」↓食事処↓メトロ東西線行徳駅↓西船橋武蔵野線乗換↓JR市川大野駅↓タクシー分乗↓「子安神社」↓徒歩20分↓JR市川大野駅↓我孫子1500頃

行徳(ぎょうとく)は、市川市の江戸川放水路以南の地で、江戸時代には行徳塩田が設置され、水上交通の要所でもあった。行徳街道には寺院が多く寺町通りの名があり、「行徳千軒寺百軒」ともいわれた歴史ある地域である。今回は江戸時代からつづく歴史の町・行徳の巨樹を観察した。(今回は柏井の産土神「土神社」として、信仰を集めた「子安神社」の巨樹も観察した)



☆押切稲荷神社

神社の創建年代等は不詳だが、現本尊は三五〇年程前に鎮座していたもの。本殿には御尊体として約八百五十年前の鎌足義政の作と言われている十一面観世音菩薩。神仏習合思想の名残と思われる、御祭神としては宇迦之御魂命となっている。

押切稲荷神社の千寿銀杏は、平成14年11月市川保存樹木に指定され、幹回り6.5m高さ30m、とされている。雌木で、毎年たくさんの銀杏がなる。

☆神明(豊受)神社

行徳街道沿いに由緒ある神明(豊受)神社がある。御祭神は豊受大神。神明神社は金海法印という山伏により建立されたと伝えられる。金海法印は徳が高行いが正しかったことから、多くの人々に行徳さまと崇められたことに因んで、行徳と云う地名になった。3年ごとに行われる行徳五ヶ町祭りの大神輿はここから出発する。

神明(豊受)神社のイチヨウは、江戸名所図会にも描かれている幹周6m程の巨樹である。

二本の巨木ケヤキは、2007年の火災で幹が焼け痛ましいが、焼けていない側は今でも沢山の葉を繁らせている。

☆浄土宗源心寺

西光山安楽院源心寺と称する。源心寺は、浄土宗芝増上寺の観智国師が開山となり、慶長16年(1611)創建した。六地藏(下写真)が当地では有名である。

源心寺のイチヨウは、落雷を受け上部が剪定され、本来のイチヨウの美しい姿とはかけ離れた樹形である。

☆柏井・子安神社

子安神社は、主に安産・子育ての神が祀られ、御祭神は木花之開耶姫命(このはなさくやひめ)であり、古来より産土神「土神社」として多くの信仰を集めた。



神社の創建年代は不詳だが、元禄5年(1698)建立の庚申五層塔、元文5年(1746)の水舎、その他文政・天保・安政年間の灯笼、絵馬なども認められる神社である。境内の庚申五層塔は市川市重要文化財である。

拝殿周辺はスタジイの巨木に覆われた鎮守の森である。参道沿いのスタジイの巨樹群に覆われた参道は、日中でも暗闇参道の佇まいがある。

プロジェクト報告

「短歌の会」(第七回 最終選択作品)

マイカーも海外旅行も縁遠し

庭の草むしり夏の日を過ごす

今日こそは心を込めて墨を磨る

親しき友の歌を書かんと

アサギマダラ太平洋を越え来しや

入笠山にしばし休めよ

大鳥居めざして登る九段坂

「もう登れない」とある夏の母

命日の来るたび今も悔い残る

反抗期にて母たたきしは

残りたる素麺三束茹で終えて

久々に晴れ夏の過ぎゆく

北朝鮮と今こそ対話必要ぞ

アメリカも共に生き抜かむため

ハンガーに秋の服並び出番待つ

少し濃い目の色とりどりに

(以上8名分)



美崎 大洋

あびこだより 7号

「我孫子と将門伝説」(放談くらぶへのガイド)

戸田 七支(かずゆき)

さる6月、我孫子市民プラザホールに於いて関東学会主催による将門フォーラムが開催された。

当日200名を越す聴衆が、13時から17時まで熱心に聞き入った。将門に対する関心が如何に大きいかを物語っている。しかしながら会場を後にした人達、果たして満足したであろうか。答えは「ノー」ではないだろうか。

主催者に「どうして我孫子でフォーラムを開いたのですか？」と問えば、「ここは将門伝説が多くあり、何か関係がありそうだから」と答えるであろう。『我孫子市史古代中世編』には次のように書かれている。

「・・・伝説をもつて史実とすることは出来ない。しかしながらこの地域に将門の乱に関する伝説が濃厚に残存していることは重要なことであつて、これを無価値なものとするべきではない・・・」。

第一級史料「将門記」には始めから終わり迄、一切我孫子は登場しない。それなのに何故我孫子に多くの将門伝説が残っているのか、それが何故重要なことか言及していない。実はここをしっかりと認識する事が将門を研究するうえで重要なこととなる。

筆者は我孫子市日秀地方のみに存在する或る伝説からヒントを得て、将門の本拠地がこの地域であるとの結論に達した。本拠地であるが故に多くの伝説が残された。例えば将門の守り本尊である日秀観音の存在、相馬御厨の下司職に就いた、桔梗御前を木下竹袋に住ませたことなど日秀で平穏な生活をしていた名残であろう。また本拠地であるが故に遭遇したであろう略奪と殲滅の惨劇の後に生まれた多くの伝説がある。例えば龍泉寺の焼失、桔梗を植えない、キュウリを輪切りにしない、成田詣でをしない人の存在、これ等は将門の死後生まれたものである。

本拠地の概念も考えて見る必要がある。将門の戦力を支えている母体となるもので、戦略物資を製造し、貯蔵し、供給する役目を果たす所である。前線の将門とは離れている必要がある。前線で矢ジリを作っていることは出来ない。我孫子の周辺に古代の製鉄所が存在した理由がここに見ることが出来る。

反乱者、謀反人と言う将門の人物像はたぶん明治維新政府によって歪められた面がある。江戸時代までは崇りの神様として菅原道真と同様に祀られていたはずである。このことは神田明神の祀り方に見られる。明治6年撰社の地位に格下げしていた。もとの地位に戻したのは、昭和59年になってからであると宮司が言っている。

新しいパワースポットが我孫子の地に甦る日は近い。

懐かしの北京の思い出(その1)

伊藤一男

これからお話しするのは、約20年昔の北京の思い出です。

中国の環境保全(主として産業廃水の処理)に対する技術協力の仕事で国際協力事業団から北京に派遣されることになり、一抹の不安を抱きながら北京首都空港に降り立ったのは、1995年3月20日のことでした。空港から都心までの車窓から見える風景は、街路樹のポプラが花を咲かせ、柳が薄緑の新芽を吹き出し、まさに春を迎えんとする息吹が感じられました。

日本では、ちようどこの日が奇しくもサリン事件が起きた日であり、またその二ヶ月前にはあの悲惨な阪神淡路大地震に襲われた多難な年でもありました。

私にとって中国の印象は、「近くて遠い国」です。確かに、中国と日本はわずか海ひとつ隔った隣国ですが、国の広さも違うし、気候も違います。したがって、お互いの食文化も違うし、習慣も違うことはもちろんですが、予想以上に隔たりが大きく、そのためにしばしば戸惑いを感じたのは、彼我のものの考え方です。北

京に滞在中、両者の間には随分と認識にずれがあることを実感させられました。いくつかの例を挙げてみましょう。

① 日本人はA型、中国人はB型

日本人と中国人は、たとえば顔つきがよく似ており、言葉を発するまではなかなか見分けがつかないし、また情報伝達の手段としての漢字を共有しているなど、共通点も多く、欧米人と接するよりははるかに取っ付き易いです。しかし、お互い共有している漢字でも、例えば「走」はせっかちな日本人は「走る」と意味付けたのに対し、悠長な中国人は「あるく」と意味付けたように、似ているようですが両者の間にはずいぶん異なる点も多いと実感しました。



最も大きな相違点のひとつは、日本人の「和」を重んじる集団主義に対し、中国人の独立自尊を重んじる個人主義ではないでしょうか。人間関係の重視、過度に走らない中庸的なものの考え方、絶対的な基準でなく相対的な価値判断など、これらはいずれも日本人の国民性といえるでしょう。

ところで、血液型による性格の違いが昔からよく言われますが、日本人はA型が最も多く、したがって日本人の性格は総じて「几帳面」「生真面目」「周囲に敏感」とも言えます。これに対し中国人は、自分の血液型を知らない人が意外と多いのですが、ある調査によればB型がいちばん多いそうです。中国人には「自己主張しながらわが道を行く」タイプが多いと感じたこともむべなるかなです。

確かに、私が勤務していた職場でも、中国人の研究者は一般に自己主張が強く、理論的に間違っていることが明らかであっても、自分の主張をなかなか引っぱめようとはせず、うんざりさせられることがしばしばありました。業務上知り得た知識は、われわれ日本人にとっては職場に帰属するものであることにそれほど抵抗感はありませんし、また一般的にそれはマニア

ル化されて共通の資産となりますから、たとえ担当者交替しても比較的スムーズに技術は伝播されますが、中国では業務上知り得た情報や知識は原則として個人が独り占めしてしまい、なかなか共有化できません。せつかく苦勞して体得した知識を何故タダで他人に教えなければならぬのか、というのが彼らの論理なのです。

② ストレスを感じない中国人

私が勤務していた研究所のメンバーの幾人かに、「あなたは日頃ストレスを感じますか」と訊ねたところ、ほとんどの研究者はストレスなんて感じないとのことであり、ストレスという意味さえはつきり知らない者もいました。何という幸せな国民でしょうか。おまけに、研修のため日本を訪れたことのある研究員が「日本ではオフィスビルの明かりが夜九時をまわつても一向に消える気配がなく、まだ多くのサラリーマンが働いている様子であった」「夜、山手線に乗ったが、疲れきった表情のサラリーマンで相変わらずのラッシュであった」「日本人の壮年者は同年代の中国人に比べて何となく髪の毛が薄く、白髪も多く、ストレスがたまっているようだ」などと日本の印象を話してくれました。

私の経験からすると、中国人同士でよく口喧嘩をします。それは男性ばかりではありません。女性も同じです。それも大声で激しく相手を非難したり、罵り合ったりしますが、お互い気が済むまで言い終えたとさうさと別れてしまいます。そして翌日会うと、お互い何も無かったかのごとく「おはよう」「元氣？」などと声を掛け合つてまた一日が始まるのです。初めてこの光景を見たとき、昨日あれほどまでにやり合つていたのに、と驚くというよりは羨ましく思います。どうやら中国人はストレスを感じてもその都度発散、解消しているようです。

③ 恥と面子(めんつ)

北京において日本から入ってくる情報でいささかうんざりさせられるのが、企業の不正行為や政治家・官僚の収賄事件です。たまたま運が悪くて発覚してしまうた当事者が言うせりふは、「世間をお騒がせして申

し訳ない」というものです。自らが惹き起こした不祥事に対する罪の意識が欠如しています。日本では罪の意識よりも恥の意識の方が大切なのでしょう。まさに罪よりも恥の文化と言われる所以です。

これに対して中国人は、恥でも外聞でもなく、ひたすら面子を重んじる民族のようです。「名存実亡」と言われるように、面子は誇り高い国民の一種の形式主義ですが、中国では特に交渉ごとのときなど随所に見え隠れし、相手の面子を潰そうものなら、せつかくまとまりかけた交渉も水泡に帰してしまいます。逆に「それでは私の立場がない。今回は私の面子を立てて欲しい」と詰め寄ると、意外と「よし、わかった」とまとまるケースがあります。中国側の面子を汚したために中国市場への参入に手こずった日本企業の例はいくつもあります。(次号に続く)

付記

二十年前の想い出話を持ち出したのには理由があります。来年4月から5月頃に、「異文化を学ぶ会」プロジェクト活動の一環として、北京旅行を計画しています。万里の長城や頤和園、紫禁城など、荘厳な中国の歴史の一端に触れるとともに、市民の日常生活文化も学びたいのです。詳細は追つてご連絡しますが、ご希望の方は今から心づもりをお願いします。(写真は北京市にある紫禁城・故宮博物院)



(写真は北京市に

文学掲示板

平成三十年一月展示作品(文学の広場)

ハケの道の木草刈り込み整へて
里守らむとする人ら尊し

東京 関 貴与

戸袋に繪皮張られし志賀直哉の
急遽の書齋我孫子に残る

取手 斎藤 二美代

志賀直哉瀕死の長女を抱きかかへ
医院へ走りし道今踏みしむる

取手 関澤 喜久子

向かひ家の間を縫ひて日射しあり
二人のタオルは今日乾き良し

松戸 千葉 照子

誘致せむと私財投げうち成りし駅

我孫子駅前飯泉顕彰碑立つ

取手 木村 和子

白馬岳しろうまの大雪溪をゆく吾に
唸りを上げて落石飛び来る

我孫子 藤井 吉彌

楚人冠俳句「序跋詩歌集」より 杉村楚人冠

昭和九年

冬

引き上げし川舟かわき柳枯れ

柳枯れて水の上の恋しかな

一もとの冬木にからむ煙かな

枝岐(えだまた)に小雪且つ残る冬水かな

もえつかぬ暖爐にこむパジャマかな

向ひ合う壁爐に熱き片頬かな

雨に賭けて俎をたく時雨かな

向ひ合ひて小指を結ぶ時雨かな

雨に賭けて蜜豆をぐる時雨かな

今後の行事予定

「放談くらぶ」

日時 12月9日(土) 14時〜16時

会場 アビスタ(我孫子地区公民館 第2学習室)

講師 戸田七支氏

演題 「我孫子と将門伝説」

(6ページ あびこだより 79号参照)

◎参加費 会員無料 非会員三〇〇円

申込みTEL&FAX(七二八五〇六七五) 佐々木まで

「散歩部会」

日時 11月19日(日)第128回史跡文学散歩

谷中の寺町を歩く(会報9月号に掲載)

9時、我孫子駅改札口内集合。(小雨決行)

お弁当持参ください。

「手賀沼部会」

日時 10月14日(土)予定されていた川めぐりと

木下史跡散歩は雨天のため中止となりました。

「総務部会」

日時 11月7日(火) 船橋街あるきネットワークよ

りガイド研修の依頼、我孫子市内のガイドと

情報交換会を実施予定

「プロジェクト「巨木クラブ」予定

「樹木観察会」

第12回 11月17日(金)千葉市①検見川神社のケヤ

キ②子安神社のタブノキ・スタジイ③真蔵院のタブ

ノキ④三代王神社のスタジイ・タブノキ

第13回 日程未定 柏市、柏レジャ水辺公園①大洞

院のオオイチョウ②花野井香取神社のスタジイ・ム

クノキ③布施弁天のカヤ・ケヤキ

「プロジェクト「短歌の会」予定

11月28日(火)13時〜第8回短歌の会

けやきプラザ10階小会議室

□ 「出前講座」に次の日程で要請があります。

11月14日(火) 「新田次郎と岡田武松」
12月13日(水) 「桜あれこれ」
12月14日(木) 「我孫子における平将門伝説」

当会の最近の動き(報告・案内)

散歩部会

9月17日(日)第127回史跡文学散歩は

雨天のため中止となりました。

研修部会 放談くらぶ

10月8日(日) 「大人の楽しむ昔話」関口小夜子氏

手賀沼部会

10月29日(日)第二十三回手賀沼エコマラソンが雨

天にも拘らず行なわれ、当会から担当役員が会

場に詰めました。

「市民のチカラ」に展示出展準備状況

今年の「市民のチカラ」は11月25日(土)・26日(日)に

開催されます。当会は今回「岡田武松と新田次郎」

をテーマに展示の予定で、現在、着々と準備を進めて

います。

(入会員紹介)次の方が入会されました。

白田晴世様、小林純子様、中村勇様、中村信江様

編集後記

台風や大雨の影響で当会の多くの行事が中止

となった。今年日本に上陸した台風の数や台風による被害

は意外や昨年と比べると少ないという。しかし豪雨による被害

には深刻なものがあつた。特に7月初旬に起きた九州北

部豪雨は甚大な被害をもたらした。台風の当たり年と皮

肉られる印象となつた▲日本は、地質学的に、地震、津波、

台風、高潮、洪水その他諸々の自然の脅威に晒されやすい

国だと言われる。この数週間だけでも、台風は不思議と土

曜日、日曜日に限って日本上陸を果たしている。恰も暦を知

っているかのような上陸の仕方だ。さらに日本列島を縦断

するに至つては地形に知識のある生き物のようなだ▲地震に

しても台風にしても科学が未発達な時代、古代人が天災を

地の神や水の神、空の神の怒りと考えても少しも不思議で

はない。ヤマタノオロチを代表とする伝説、神話も古代人の

当時の精一杯の創造力、想像力の結果であろう。(美崎)